

みんなでステップアップ

吹奏楽楽器別教本 トランペット

CONTENTS

■1 楽器と演奏の基本

■1.1 組立とメンテナンス	2
■1.2 マウスピースの選択	2
■1.3 呼吸	2
■1.4 姿勢と持ち方	3
■1.5 アンプシュア	3

■2 基礎トレーニング

■2.1 マウスピース	4
■2.2 ロングトーン（長い音）	4
■2.3 リップスラーゲ&リップトリル	5
■2.4 タンギング&トリブルタンギング	7
■2.5 ペンディング（中級以上に限る）	9
■2.6 ベダルトーン（中級以上に限る）	9
■2.7 スケールと分散和音	10

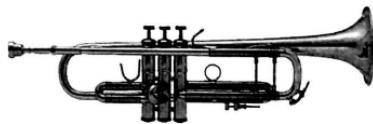
■3 練習曲

■3.1 初級（練習曲、二重奏、四重奏）	16
■3.2 中級（練習曲、二重奏、四重奏）	20
■3.3 上級（練習曲、二重奏、四重奏）	26

第1章 楽器と演奏の基本

1 組立とメンテナンス

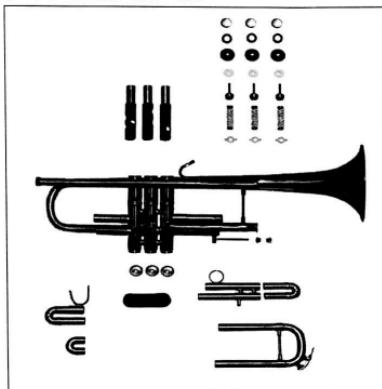
【写真1】楽器全体写真



ピストンにはバルブオイルを、スライドするトリガーにはスライドグリスをつけます。月に1回は水を通してお手入れをしましょう。

マウスピースは特に汚れがちなので、ブラシを使って洗浄してください。

【写真2】楽器分解、部品の写真



2 マウスピースの選択

通常、楽器を購入すると付属品としてついてくるマウスピースがあります。例えばBach (7C)

【写真3】やYAMAHA (11C4)などで、これがぴったりくる方もいらっしゃるでしょう。

しかしそのまま使用せず、ジャストフィットするものを探してみてください。スタンダードサイズは2C、3C、5Cあたりです。少し大きめの2C、3Cあたりから大きくしたり小さくして試してみましょう。必ず心地よく吹けるマウスピースが見つかるはずです。



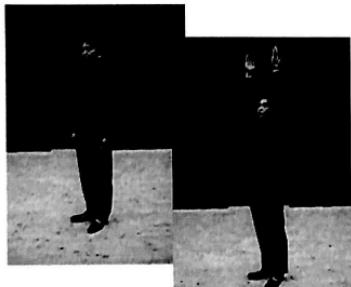
【写真3】

3 呼吸

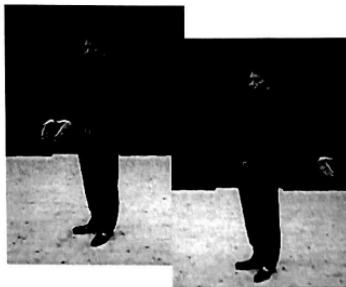
私達は呼吸をしないと生きていけません。ふだんは無意識に活動していますが、楽器を演奏する際は意識しなければなりません。事は簡単でたくさん多量に吸えはよいのです。

吸いながら腕を上げていけば胸式呼吸になります【写真4】。吸いながら腕を前から後ろへもっていけば腹式呼吸になります【写真5】。この2つのハイブリッド式が最もよいと思います。

【写真4】



【写真5】



4 姿勢と持ち方

よい姿勢で普通に立ちます。足は肩幅に開き顔は正面に向けて、そのまま楽器を構えればよいでしょう。座奏は、立奏の姿勢のまま椅子に座ります。ただし背もたれには背中をつけないでください。
持ち方です。【写真6】は手に負担をかけてしまうので、【写真7】のように持ちましょう。グッと力を入れて握らなくてよいです。



(負担をかける持ち方)



5 アンプシュア

最も重要なのがこの「アンプシュア」です。トランペットに限らず吹奏楽器は必ず演奏する口の形があり、これによって上達度に差がついてしまうことがあります。次のようにセッティングしてください。

a. 直径4ミリ以下のストローを歯で軽く噛み、ストローを軽く吹きます。【写真8】



b. 吹く際は、コーラ瓶の飲み口に唇をあててフルートのように音を出す要領で息を入れます。【写真9】



c. そのままの状態でマウスピースをストローに突っ込んで、a.のように息を入れます。【写真10】



d. 息を出しながら、ぐくゅっくりストローを抜いていくと、トランペットを吹けるアンプシュアの完成です。

【写真11】

ストローを抜いててもストローを吹く要領で息を出し続けると、自然と音が出てしまうでしょう。



第2章 基礎トレーニング

① マウスピース

ストローと瓶を吹く感覚でアンプルシャアをつかめたら、次はマウスピースでのトレーニングです。しっかりとした音がでているのを確認してください。最初のうちはどんな音でも構いませんから、とにかく無理をしないで慣れましょう。まず【譜例1】の練習をおこなってください。

【譜例1】

J=60
1・2・3・4

*3、4拍目で息を吸います。吸うときは胸式腹式のハイブリッド式でおこなってください。

音が出てきたら【譜例2・3】の練習もおこないましょう。

【譜例2】

【譜例3】

*このトレーニングで特に注意してほしいのは、口笛を吹くように音を移動させることです。

(ド) — (ソ) — (ド) — (ソ) — (ド)
Ta タ e エ i イ e エ a ア

マウスピースでのトレーニングの仕上げとして【譜例4】の練習をおこないます。トロンボーンのスライディングのように、グリッサンドで音を途切れさせないように演奏しましょう。

【譜例4】

*シラブルを使いますが、これについてはリップスター(P.5)を参照してください。

② ロングトーン(長い音)

【譜例5】は、いろいろな効果が見込めるトレーニングです。プレスコントロール(お腹の支え)をして、緊張しにくい身体をつくることができます。音色のチェック以外に、息がしっかりと吸えているか、アンプルシャアがちゃんとセットアップできているか、などもチェックしながら演奏しましょう。

【譜例5】

J=60
4拍 4拍 8拍 16拍 ↑注意
24拍 36拍

36拍ロングトーンすることによって、音は揺れなくなり、アンプシャアが決まり、胸式腹式のハイブリッドの呼吸ができます。さらに吹いている間に心拍数が減り、気持ちが落ち着き、*pp*の練習にもなります。こんな効果のあるトレーニングはやらないと損ですよ。

次の【譜例6】は、1オクターブ(23拍)を“1つの息”で網羅するイメージで、息を出すトレーニングです。

【譜例6】

↓
(トリガーカード1番と3番を抜き、Eトを出してください)

③ リップスラー&リップトリル

息がたっぷり吸えるようになり唇がほぐれたら、リップスラーとリップトリルのトレーニングです。これはピストンを使わないでおこなうスラーやトリルです。音が移り変わる瞬間にアバチュア（息の通り道として唇の中央にできる穴）が気持ちよく動いてくれますが、唇が柔らかくないとスムーズに音が変わりません。この柔軟性を身につけるためのトレーニングです。マウスピースのトレーニングと同様に、シラブルを使って練習しましょう。

【譜例7】では子音が含まれているので、その言葉をしゃべるように舌を持ち上げてください。

【譜例7】リップスラー

*高い音に行く際、“息を増やして”吐くようにマウスピースへ入れていくことが重要です。唇は、横から息がもれないようにするだけです。

[譜例8] のトレーニングは次のようにおこなってください。

- 声を出して、チャーエーイーチーエーアーと音程をつけて歌いましょう。タンギングをするのでTがつきます。
- 次はマウスピースに唇をつけて、音も声も出さずに歌ってみます。
- 最後に音を出して練習しましょう。全ての運指で練習してください。

[譜例8] リップスラー

The musical score consists of four staves of music in treble clef. The first staff shows a pattern of eighth and sixteenth notes with a slur over them, labeled with the vocalization "(チャ)(エ)(イ)(チ)(エ)(ア)" and a "0" below it. The second staff continues the pattern with a "2" below it. The third staff begins with a "1" below it. The fourth staff concludes the pattern with a "2・3" below it. The fifth staff starts with a "1・2" below it and ends with a "1・2・3" below it.

[譜例9] も[譜例8]と同様にチーエーイーエーイーエーと歌ってください。こちらも全ての運指で練習しましょう。また、口笛で吹いてみると舌の動きがよくわかると思います。リップスラーとリップトリル、いずれも口笛を吹いている舌の動きが、トランペットでも同じ動きをするはずです。

[譜例9] リップトリル

The musical score consists of four staves of music in treble clef. The first staff shows a continuous series of sixteenth-note patterns with a slur, labeled with the vocalization "(チ)(エ)(イ)(エ)" and a "0" below it. The second staff continues with a "2" below it. The third staff begins with a "1" below it. The fourth staff concludes with a "2・3" below it. The fifth staff starts with a "1・2" below it and ends with a "1・2・3" below it.

【譜例10】は速いリップスラーの練習です。すべての調でトレーニングしてください。

【譜例10】速いリップスラー

J=80~110

0— 12— 123—
2— 23—
13—

4 タンギング＆トリプルタンギング

タンギングとは、音の出だし（立ち上がり）や音を区切るときに舌を使う奏法です。舌はアーティキュレーションを自在に操る器官ですから、しっかりトレーニングしてください。

「Tu」という表記はどのように発音しますか。「ト」でしょうか？ 「トゥー」でしょうか？ 「ツ」でしょうか？ 日本人の場合、「チュー」と発音したほうが私はよいと思います。しかも母音の「u」は基本型として受け止め、音の高低にシラブルが関わってきますので、「Taチャー」「Teチー」「Tiチー」…と発音が変わっていきます。ハイトーンでは「Pi」「Zi」となると思います。

【譜例11】はマイケル・デイヴィスによるタンギングのトレーニングです。

【譜例11】

J=72~120



[譜例12]はトリプルタンギングの練習です。トリプルタンギングは、「Tu Tu Ku」と発音します。「トゥ」「トゥ」「ク」ではなく「チュッ」「チュッ」「クッ」と小さい「ッ」が入るくらい、しっかり発音しましょう。さらに、「TTK」の「K」にアクセントをつけてトレーニングします。ゆっくりから始めて、「K」にアクセントがつけられないくらいまで速度を上げます。TとKのアタックに差が感じられなくなればよいでしょう。

このトレーニングをおこなうことによって、ダブルタンギングは自然にできるようになると思います。ですから、トリプルタンギングからトレーニングしてください。

[譜例12]

$\text{J}=80 \sim 168$

*いろいろな調性でトレーニングしてください。

5 ベンディング (中級以上に限る)

少しレベルが上がってきたと感じたら、ベンディングのトレーニングをしましょう。ベンディングは「ねじまげる、とどめる」の意味で、ピストンを使わずに音程を変えます。これはアバチュア(唇の穴)の強化が目的です。振動しているアバチュアの所を、音程を上下させることによって強化します。

1回目は運指通りに音を出して、音程感覚を憶えてください。リピートしたときベンディングでトレーニングしましょう。

[譜例13]

J=60~90

The musical score consists of three staves of music. The first staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes. The second staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes. The third staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes.

*音が下がるにつれて、息の量を増やしていくようにプレスをコントロールしてください。下顎が前後に動かせるので、舌と運動して感覚を磨きましょう。

6 ペダルトーン (中級以上に限る)

ベンディングが上手になったら、ロートーンより低い音域を出すトレーニングです。実際には曲の中にほとんど出てきませんが、あくまでトレーニングです。唇を柔らかくするためだと思ってやりましょう。

[譜例14]

J=70

The musical score consists of two staves of music. The first staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes. The second staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes. The third staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes. The fourth staff starts with a quarter note followed by a series of eighth notes.

☆1 トリガー1番と3番を抜き、E♭を出してください

☆2 0でない時はこの運指で

注：ベンディングをおこなう要領で口内を変化させると、とてもやりやすいです。

7 スケールと分散和音

全調のスケールを練習しましょう。スケールはとても重要な練習ですから、必ず修得してください。スケールが重要なのは、すべての音に対して音質の平均化を得ることができるからです。また、音楽は調性でできているので、調性ごとの連指がより短い時間でマスターできるためです。分散和音も同様です。

* 諸名は審査で表記してあります。

a.マイケル・ティヴィスのスケール

J-72

変口長調 (B dur) 変木長調 (Es dur)

変イ長調 (As dur) 変ニ長調 (Des dur)

変ト長調 (Ges dur) 口長調 (H dur)

木長調 (E dur) イ長調 (A dur)

二長調 (D dur) ト長調 (G dur)

ハ長調 (C dur) ～長調 (F dur)

b. アーバンの短調のスケール

J=60~120

ト短調 (g moll)

The image shows two staves of musical notation for piano. The top staff is in G major (three sharps) and the bottom staff is in C minor (no sharps or flats). Both staves feature sixteenth-note patterns with various slurs and grace notes.

△短調 (f moll)



変口短調 (b moll)



変木短調 (es moll)



変イ短調 (as moll)



変ニ短調 (des moll)



要ヘ短調 (fis moll)



口短調 (h moll)



木短調 (e moll)



イ短調 (a moll)



二短調 (d moll)



c. アーバンの半音階のスケール

$\downarrow = 72 \sim 144$

The music consists of eight staves of sixteenth-note patterns. The key signature changes from C major (no sharps or flats) to F major (one sharp), then to G major (two sharps), then to D major (one sharp), then to A major (three sharps), then to E major (four sharps), then to B major (five sharps), and finally back to G major (two sharps). Measure numbers 1 through 8 are indicated above each staff.

d. アーバンの分散和音

$\downarrow = 80 \sim 120$
変ロ長調 (B dur)

The music consists of two staves. The top staff shows a sequence of broken chords in B major, starting with a G major chord and moving through various progressions. The bottom staff shows a continuation of these chords, labeled "変ホ長調 (Es dur)".

変イ長調 (As dur)



変ニ長調 (Des dur)



ト長調 (G dur)



ハ長調 (C dur)



ヘ長調 (F dur)



♩= 80-120

木短調 (e moll)



イ短調 (a moll)



二短調 (d moll)



ト短調 (g moll)



ハ短調 (c moll)



ヘ短調 (f moll)



変ロ短調 (b moll)

